

- 阿蘇地域は、広大な草地を生かした放牧が行われているが、**担い手の確保、牧野組合員外の牧野利用、ICT技術を活用した安全で省力的な放牧体系の確立、牧養力向上が課題。**
- このため阿蘇地域振興局農業普及・振興課で、**広域放牧を行う牧野等への支援、未利用牧野の放牧利用推進、放牧ICTの実証**を実施。
- その結果、**広域放牧のスキームおよび未利用牧野の放牧再開に向けた支援体制を構築**した。

具体的な成果

1 広域放牧を行う牧野への支援

- 安全で安心につながる**広域放牧のスキームを構築**



2 未利用牧野の利用推進

- 組合員外利用における課題の抽出、牧野の掘り起こし**を実施
- 未利用牧野での放牧再開モデル牧野の選定、課題を抽出**
- 放牧再開に向けた支援体制を構築**



3 放牧ICTの実証

- 放牧地での事故予防や看視の負担減のため**放牧ICT技術を実証**
- 防火帯作成の省力化のため、大型ラジコン草刈機による防火帯作成を実演



普及指導員の活動

1 広域放牧を行う牧野への支援

- 受入れ牧野、管外預託農家、関係機関の間に入り、**広域放牧実施のためのプログラムを作成**
- 安全で安心につながる広域放牧のスキームを構築**
 - ・定期的な意見交換会
 - ・放牧に係るリアルタイムの情報共有
 - ・放牧事故を防止するための衛生検査スケジュール
 - ・不測の事態に備えた緊急体制

2 未利用牧野の利用推進

- 未利用牧野の畜産的利用(放牧・採草)について**聞き取り調査を実施**
- 放牧組合、役場、普及で話し合いを実施し、**放牧実践者を選定**
- 未利用牧野放牧再開後の**技術指導、飼料作物適正試験を実施**

3 放牧ICTの実証

- 放牧ICT技術の効果について、実証地で**農家(使用者)と意見交換を実施**。

普及指導員だからできたこと

- ・**地域の課題を熟知**し、生産者や団体との**企画運営調整**ができる普及指導員が中心となり、様々な取り組みが行われた。

牧野利用活性化に向けた支援活動

活動期間：令和2年度～継続中

1. 取組の背景

牧野の畜産的利用（放牧、採草）は草原の維持に重要な役割を果たしている。一方で、有畜農家の減少等により、牧野の畜産的利用が衰退しているところもあり、草原の荒廃が懸念されている。また、牧野組合員以外からの牧野利用希望の声は多いが、組合員以外が牧野を利用するには課題も多く、合意形成支援が必要である。

さらに、放牧事故を懸念し、放牧を控える動きや牧養力の低下による放牧頭数の制限といった問題もあり、安全な放牧体系の確立といった支援も求められている。

そこで、「畜産による牧野利用の推進」を目標に、①広域放牧を行う牧野等への支援、②未利用牧野の放牧利用推進、③放牧ICTの実証に取り組んだ。

2. 活動内容（詳細）

①広域放牧を行う牧野等への支援

円滑に広域放牧を行うため、毎年放牧前に関係者を交えた意見交換会を開催、緊急時の連絡体制や衛生検査スケジュール等についての情報共有を行っている。（写真1）



②未利用牧野の放牧利用推進

牧野利用推進にあたっての課題抽出および牧野の掘り起こしを目的に、阿蘇管内の牧野組合長を対象に聞き取り調査を実施した。今後の牧野利用推進には組合員以外の利用を進めることが効果的と考え、主に組合員以外の牧野利用について聞き取りを行っている（R4.2末時点:81/170牧野実施済み）（写真2）。



また、組合員外利用牧野モデルを作成することが牧野利用推進・合意形成支援に効果的であると考え、令和元年度に野焼きを再開した南阿蘇村白川牧野をモデル牧野として選定、関係機関協力のもと約4haの放牧地を整備した。令和3年6月には、面接により選定した放牧実践者によって放牧が再開された。再開後は定期的に現地の調査や指導を実施している（写真3）。



③放牧ICTの実証

放牧地での事故は飼養者の経済的・精神的な負担となっている。また、放牧地が自宅と離れている際の牛の様子確認も時間と労力がかかることから、自宅からでも放牧地の様子を確認できる技術（放牧ICT技術）への期待が高まっている。一方で、その効果については不明瞭な部分も多く、まだ普及段階には至っていない。そこで、草地畜産研究所と連携し、当該技術導入牧野の調査を実施、情報収集を行っている（写真4）。



3. 具体的な成果（詳細）

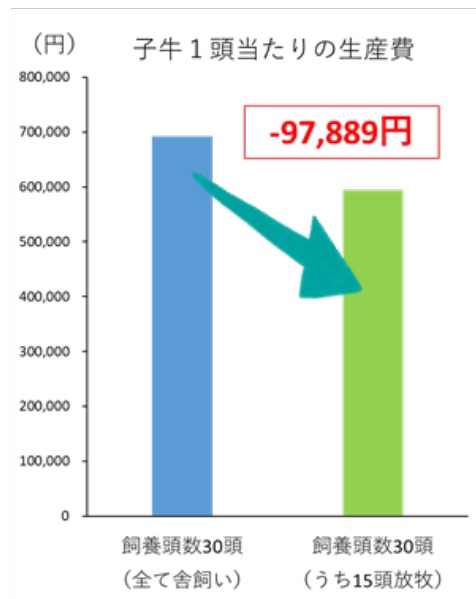
牧野の巡回調査により、牧野を組合員外が利用する際の課題抽出ができ、放牧利用再開を希望する牧野についても掘り起こすことができた。

また、補助事業も活用し、未利用牧野を放牧地として整備、放牧再開牧野モデルを作成することができた。放牧再開後には定期的に現地の調査を行い、未利用牧野を整備・放牧再開するにあたって①放牧経験牛を混ぜた放牧、②暑熱対策、③安定的な水の確保、といった課題を抽出することができた。

令和3年11月には放牧再開を希望している牧野組合員、放牧希望者を交えたモデル牧野の視察を実施し、新たな未利用牧野の活用に向けた協議を行った。

放牧実施による経済効果について試算したところ、子牛1頭当たりの全算入生産費が放牧することで約10万円低くなることが示された（飼養頭数：30頭、放牧頭数：15頭、放牧期間：7か月の条件で試算）。

以上のことから、先に述べたような普及活動を継続して行い、放牧を推進することで経営に余裕が生まれ、阿蘇の畜産・牧野利用の活性化が期待される。



4. 農家等からの評価・コメント（南阿蘇村役場G氏）

本村内の牧野巡回調査及び未利用の牧野についての協議等に同行させていただいた。令和4年度から放牧再開が2牧野で予定されていることから、その効果があったと思う。

今後も畜産・牧野利活用の活性化を図ることで草原の維持に寄与できるよう取り組んでいく。

5. 普及指導員のコメント（阿蘇地域振興局 農業普及・振興課）

牧野の巡回調査や放牧再開に向けた整備を通して、牧野を放牧地として活

用する際の管理や利用における課題の抽出ができた。さらなる調査やとりまとめを行うとともに、関係者との支援策検討を進め、牧野での放牧推進を図っていききたい。

6. 現状・今後の展開等

牧野の巡回調査を継続して実施するとともに、将来の牧野利用者となる若手農業者に対しても牧野利用についての意向調査を行う。未利用牧野の利用推進に関しては、管内市町村との支援体制の整備を図りつつ、合意形成支援等を行う。

加えて、放牧ICT技術の検討等、様々な視点から畜産による牧野利用の推進を図る。